

8月下旬、北軽井沢の裏庭にある物置の脇で、ひときわ白く目立つキノコを見つけました。針葉樹の落ち葉が積もった林床から、真っ白な傘と柄がすっと伸びています。傘はまだ十分に開いておらず、卵形から鐘形に近い若い個体です。柄には白いツバがあり、地際を確かめると基部には袋状のツボも明瞭に認められました。さらに柄の下半部には、細かな繊維状のささくれが目立ちます。

これらの特徴から、猛毒菌として知られるテングタケ科テングタケ属の「ドクツルタケ」と同定しました。純白の姿は清楚で美しいのですが、アマトキシソ類などの猛毒成分を含み、誤食すると肝臓などに深刻な障害を起こし、死亡することもあります。「殺しの天使」とも呼ばれる、その美しさとは裏腹の危険なキノコです。

ただし、テングタケ科のキノコは外見のよく似た種類が多く、写真だけでの種の確定が難しい仲間でもあります。特にドクツルタケとシロタマゴテングタケは、白い傘、白いひだ、ツバ、袋状のツボなど多くの特徴が共通しています。この個体では柄の繊維状のささくれや全体の姿からドクツルタケと判断しましたが、近年は従来ドクツルタケとされてきたものにも複数の近縁種が含まれることが分かってきました。

キノコの同定では、傘だけでなく、ひだ、柄、ツバ、そして地中に隠れやすいツボまで観察することが大切です。身近な裏庭に現れた純白の一本は、キノコの美しさと猛毒性、そして「名前を決める」ことの難しさを同時に教えてくれる、印象深い存在でした。

(2026 年 8 月下旬／北軽井沢)

